

中学校技術・家庭科における分野統合に関する研究

魚住 明生*・佐藤亜由美**

Study on Integration of Technology Field and Home Economics Field in Junior High School

Akio UOZUMI and Ayumi SATO

要 旨

技術・家庭科は1958(昭和33)年に職業・家庭科から改称され、当初は技術を男子が、家庭を女子が履修していた。その後、相互乗り入れを経て、1989年(平成元)年男女共修となり、現在(2013年)では技術・家庭科は技術分野と家庭分野に分かれ、それぞれに目標と内容が定められている。そのため、学校現場ではほとんど別々の教員が担当しており、本教科においては今日においても1つの教科としてまとまりに欠ける面が多々見受けられる。学習指導要領には明確に教科目標が示されており、技術分野と家庭分野においてもこれに基づいて教科指導を行うことが求められている。

本研究では、中学校技術・家庭科におけるより効果的な教科指導を究明することを目的として、技術分野と家庭分野を相互に協調させた、本教科における分野統合の在り方を検討し、具体的な題材を提案する。

1. はじめに

技術・家庭科の教科としての変遷を調べると、戦後に職業科として始まり、1950(昭和25)年からは職業・家庭科として生産技術を中心とした教育が行われていた。その後、科学技術の発展と共に、生活技術を中核とした「基本的な技術の習得」が方針として出されたことにより、1958(昭和33)年には技術・家庭科に改称された。当初、技術・家庭科は男子が技術、女子が家庭と分かれていたが、相互乗り入れを経て1989(平成元)年には男女共修となった¹⁾。現在では交通網や情報網の発達により地域や子どもにおける技術に関する認識の差がほとんどなくなったことから、8つ全ての内容について全員必修となっている。このように今日まで技術・家庭科は1つの教科として扱われているにもかかわらず、本教科は分野により教員が異なることがほとんどである。授業の主な履修形態も、第1、2学年では年間授業時間数70時間を技術分野と家庭分野で前・後期に分けて週2時ずつ行ったり、それぞれの分野を週1時ずつ並行して実施したりしている。第3学年では年間授業時間数が35時間であるた

めに、分野ごとに隔週で授業を行っているのが現状である。以上のように、1つの教科でありながら、分野ごとに異なる内容の授業が相互に関連することなく行われることで、教科内容の理解が生徒に定着しにくい上に、教科としての目標を達成できないのではないかと考えられる。

学習指導要領²⁾において、技術・家庭科では「生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得を通して生活と技術とのかかわりについて理解を深め進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる。」と教科目標が設定されている。この目標を達成するためには、相互に関連する内容については別々に教えるのではなく、1教科として教授した方がより生徒に習得しやすいと考える。また、技術・家庭科では課題を解決していく過程で培われる問題解決能力を育成することが求められている。この能力を育成することにより、日常生活で生じる様々な問題に主体的に取り組む人格を形成することができる。日々の生活においては、技術分野、家庭分野と個々に分けられる事象ばかりではなく、相互に関連させて考えることで、解決できるものの方が数多い。このことから両分野と関連する

* 三重大学教育学部

** 四日市市立山手中学校(元 三重大学教育学部 学部生)

内容を題材として取り上げ、1つの教科として授業を行うことで、生徒の生活実態に即した学習を構築することができると思う。

本研究では、中学校技術・家庭科の指導をより効果的に行うために、技術分野と家庭分野を相互に協調させた、本教科における分野統合の在り方を検討し、具体的な題材を提案する。

2. 研究の方法

本研究では、まず技術分野及び家庭分野の捉え方について、アンケート調査や学習指導要領、既往の研究をもとに検討を行う。次に、その検討結果をもとに技術・家庭科における技術分野と家庭分野の統合の在り方を提示し、最後に具体的な題材を提案する。

まず、中学校技術・家庭科がどのように捉えられているかについて、以下の3つの視点から検討を行った。

① 生徒へのアンケート調査による検討

中学生が技術・家庭科をどのように捉えているのかをアンケート調査により分析し、検討した。

② 学習指導要領の検討

平成20年公示された中学校学習指導要領における技術・家庭科の目標と内容をその解説書を基にして検討した。

③ 既往の研究の検討

技術分野と家庭分野を関連させた授業に関する研究について検討した。

次に、これら3つの視点からの検討結果を基に、技術・家庭科における技術分野と家庭分野の統合の在り方を提示し、最後にそれに基づいた題材を提案する。

3. 技術・家庭科の捉え方についての検討

3.1 アンケート調査による検討

技術・家庭科を生徒がどのように捉えているのかをアンケート調査を基に検討した。調査は、三重県内の公立中学校3校の生徒第1学年339名と第3学年309名の全648名を対象に、質問紙(資料1)を用いて行った。質問項目として、「技術分野と家庭分野が技術・家庭科という1つの教科であることに疑問を持ったり、違和感を抱いたりしたことがありますか。」という問いを設定し、「ある・ない」の2件法で回答を求めた。この問いに対して「ある」と回答した生徒には、その理由を記述するように求めた。次に、「技術・家庭科は、技術科(技術分野を学ぶ教科)と家庭科(家庭分野を学ぶ教科)に分けた方がよいと思いますか、それともこのままの方がよいと思いますか。」という問いを設定し、「分けたほうがよい・このままのほうがよ

い」の2件法で回答を求め、さらにその理由を記述するように求めた。最後に、技術分野での学習と家庭分野での学習の相違点と共通点についての問いを設定し、自由記述で回答を求めた。

アンケート調査の結果から得られた、技術分野と家庭分野が1つの教科であることに対する疑問や違和感の有無を図1に示す。

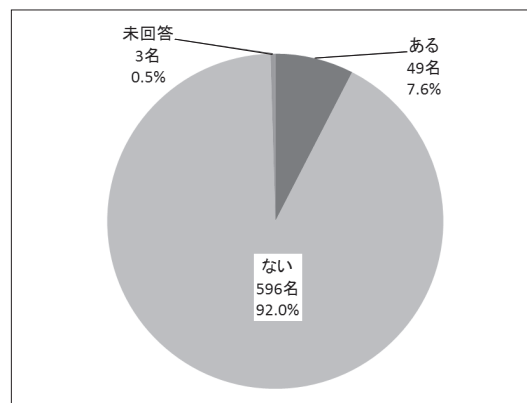


図1 技術・家庭科に対する疑問や違和感の有無

648名中596名の生徒(92.0%)が、技術・家庭科が1つの教科であることに疑問や違和感はないと回答している。このことから、ほぼ全員の生徒は技術分野と家庭分野を1つのものとして捉えていることが分かる。また、本教科に対して疑問や違和感があると回答した生徒49名の自由記述を分類すると、「授業形態やテスト、教科書が異なるから」などが18名、「授業内容が異なるから」などが18名、「共通点がないから」などが8名、未回答2名、その他3名となった。これらの生徒は技術分野と家庭分野の相違を授業における学習方法や内容から明確に認識しており、本教科の在り方に対して課題を提示していると考えられる。

次に、技術・家庭科を分離することに対する生徒の意識の有無を図2に示す。

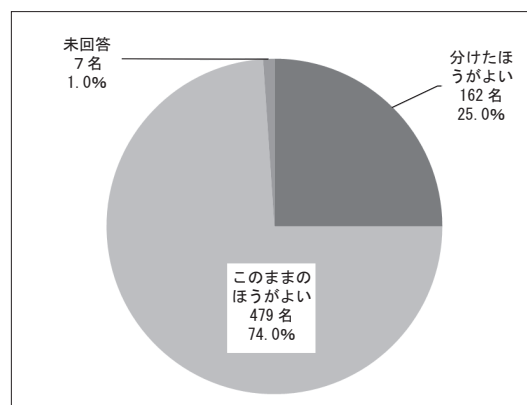


図2 技術・家庭科を分離することに対する生徒の意識

技術・家庭科を技術科と家庭科に分けたほうがよいと考える生徒は、648名中162名(25.0%)であった。この結果は、先の技術・家庭科に対する疑問や違和感の約3倍となっている。また、その理由における自由記述を分類すると、「成績やテスト、授業形態を変えてほしいから」などが72名、「授業内容が異なるから」などが45名、「共通点がないから」などが21名、「隔週などで分かりにくいから」などが16名、その他8名であった。これらのことから、生徒は本教科の技術分野と家庭分野とでは学習内容や方法が異なることは認識しているものの、本教科がこのような教科であるという既成概念が確立しているのではないかと考えられる。このことを指導者の立場から検討すると、授業の形態(製作や整備、調理、保育等)は変えられないとしても、学習内容を1つのものにするだけで、技術分野と家庭分野は異なるものであるという生徒の意識を若干ではあるが解消できるのではないかと考えられる。そのためにも、両分野を統合する在り方について検討することが求められる。

3.2 学習指導要領の検討

学習指導要領には、「生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得を通して、生活と技術とのかかわりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる。」(下線は著者が追加)と教科目標が示されている。ここで下線部は教科の目的(最終目標)を示しており、この部分を分野ごとの目標と比較・検討すると、技術分野では「技術を適切に評価し活用する能力と態度を育成する」、家庭分野では「課題をもって生活をより良くしようとする能力と態度を育成する」となる。これらの能力と態度をそれぞれの分野で育成することにより、教科の目的を達成することを示している。すなわち、教科目標から考えると、技術分野における『技術』(手段)を適切に評価し活用することにより、家庭分野の『生活』(対象)をより良くしていくことと捉えることができる。この考え方を基盤として両分野を密接に関連づけることができると考える。

さらに、分野目標を解説書⁴⁾を基に検討すると、技術分野では、『「技術と社会や環境とのかかわりについて理解を深め」とは、(中略)技術と社会や環境とは相互に影響し合う関係にあり、このことへの理解を深めることが、技術を安全性や経済性だけでなく環境に対する負荷等の多様な視点から評価することの意義の理解や、技術を適切に活用しようとする意欲につながることを意味している。』(下線は著者が追加)と解説されている。一方、家庭分野では『「生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに

に」とは、(中略)より良い生活を目指した衣食住などの生活での実践を中心に、消費者としての在り方や環境に配慮した生活の工夫などを織り込んで学習することにより、生活や社会を形成する一員としての自覚をもち、自立した生活を目指すことである。』(下線は著者が追加)と解説されている。両分野の目標において【環境】が共通する対象となっていることから、これに関する内容を中核として授業を展開することで、1つの教科として指導ができるのではないかと考えられる。

また、各分野の内容について、技術分野では「技術の適切な評価・活用」の項目が、家庭分野では「身近な消費生活と環境」の内容が必修化された。これは特定の課題に関する調査³⁾において、技術分野では「環境への配慮に関して基礎的・基本的な知識の確実な定着に課題」が、家庭分野では「技術と環境とのかかわりの理解の状況に課題」が示されたことが理由とされている。これらのことから、両分野において【環境】に関する学習をより効果的に指導することが求められている。

3.3 既往の研究の検討

技術分野と家庭分野を相互に関連させた授業に関する研究として、以下のものがある。

早川ら^{5・6)}は、家庭分野の調理で地域伝統食の押し餅づくりに使用するために、その木枠を技術分野の木材加工で作成することで、両分野を融合した教材を開発した。この実践の中で、生徒は道具が生活の中に存在する意味や、伝統食と道具のかかわりについて有機的に学ぶことができたとしている。

小山⁷⁾は、「情報」を媒介にして、郷土の食材であるマッシュルームの栽培を軸に、技術分野と家庭分野の学習内容を有機的に関連づけたストーリー性のある学習パッケージの開発を行った。この実践の中で、生徒は郷土への理解と愛着を持つと共に、情報の交換会を通して他の生徒や保護者にも情報発信することができたとしている。

廣澤⁸⁾は、「確かな学力」の実現に向け、技術・家庭科の目標にある「生活と技術のかかわり」に注目し、「学ぶ意欲」を持つことができる授業づくりを実践した。この実践から、生徒は生活の中から見つけた題材を使い、他教科や校種間の関連を視野に入れた材料や構造の試験を授業に取り入れることにより、主体的に学習をしようとするという姿勢を感想の中から読み取ることができたとしている。

これらの研究における授業実践を分野における目標と内容の2つの視点から検討してみると、早川らと小山のものは「一部教科目標に即し、一部同じ内容で行った授業」であり、技術分野と家庭分野においてそれぞれ目標と内容を《融合》させたものと考えられる。

また、廣澤のものは「分野目標に即して、それぞれの分野の内容を関連づけて行った授業」であり、技術分野と家庭分野における目標と内容をそれぞれ《連携》させたものであると考えられる。これらに加えて、従前から行われている「それぞれの分野目標と内容に即して行う授業」を《分離》として捉えることができる。これらの3つの技術分野と家庭分野の関連を概念図にすると図3のようになる。

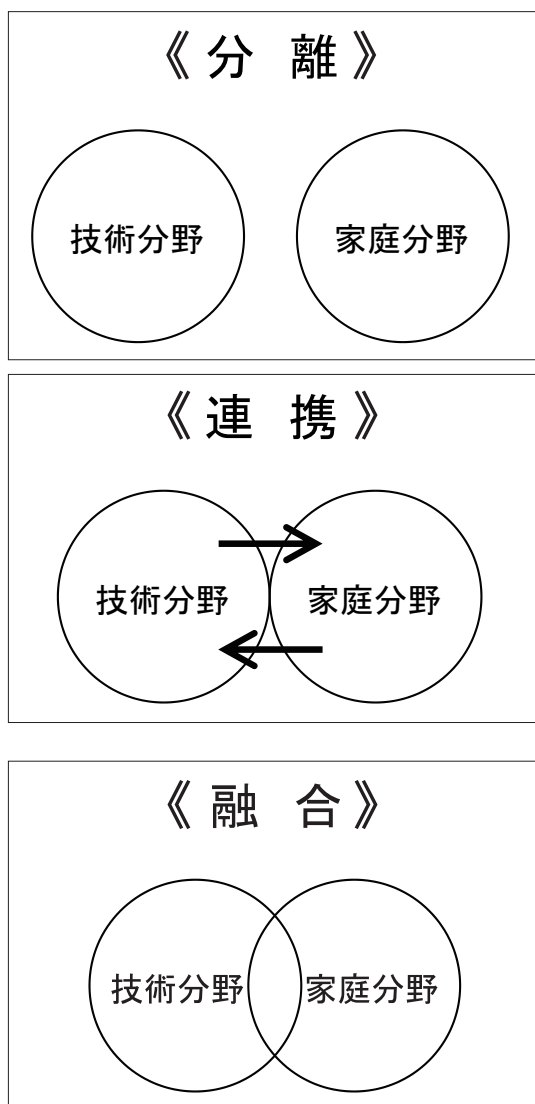


図3 技術分野と家庭分野の《分離》・《連携》・《融合》の概念図

これら《分離》と《連携》、《融合》を教科目標での協調レベルを横軸に、教科内容での協調レベルを縦軸にして位置づけると、図4のようになる。

この図から、今後技術・家庭科においては、教科目標での技術分野と家庭分野の協調をさらに進展させた取り組みが必要であることが分かる。なお、技術・家庭科を1つの教科として捉え、教科の目標に即した考え方を示す研究はいくつか見られたが、具体的な授業

内容について示しているものはほとんどなく、授業を実践しているものは皆無であった。

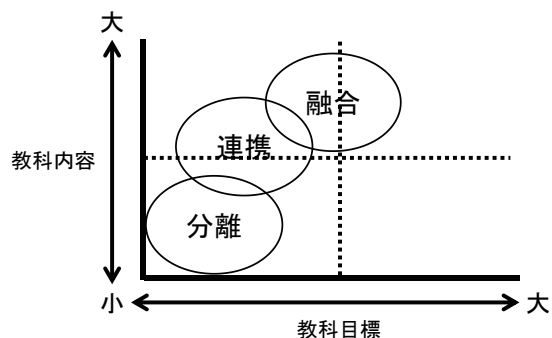


図4 技術分野と家庭分野の協調レベルによる授業の分類

4. 技術分野と家庭分野を統合した題材の提案

技術・家庭科の捉え方についての検討結果から、より効果的に技術分野と家庭分野を協調させた教科指導の在り方を提示し、それに基づいた題材を提案する。

4.1 分野《統合》の提示

学習指導要領の検討から、技術分野と家庭分野の目標が密接に関係していることや、【環境】についての学習をより効果的に行う必要があることなどの数余の知見を得ることができた。さらに、既往の研究の検討から、教科目標での技術分野と家庭分野の協調をさらに進展させた取り組みが必要であることが示された。

以上のことから、《融合》の考え方をさらに進めた新たな分野の協調の在り方として《統合》を提示するとともに、このことを図4の協調レベルによる授業の分類に位置づけたものを図5に示す。

《統合》は、《融合》での教科目標の協調レベルをさらに高めたもので、「教科を1つのものとし、教科の目標に即して両分野の視点から内容を捉えて行う授業」とする。

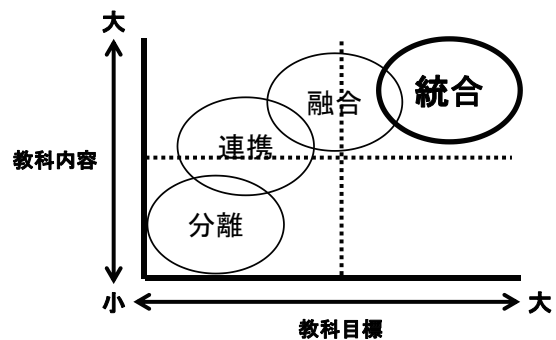


図5 技術分野と家庭分野の協調レベルにおける《統合》の位置づけ

4.2 題材の提案

《統合》の考え方を基に、【環境】を授業の中核に位置づけた新たな題材を提案する。

これからの社会では、身近な環境から地球規模のものまで、全ての市民が考え、行動することが求められている⁹⁾。技術・家庭科では環境に関する項目は各分野、各内容に分散しており、生徒の意識として十分には定着できていないと考えられる。技術・家庭科の学習を統合して行うことで、生産から消費までの一連の過程を通して環境について考えることができる。様々な視点から課題を捉えることにより、技術の適切な評価・活用やより良い生活へとつなげることができると考える。また、技術・家庭科で求められている問題解決的な学習の充実として、課題を解決する時には個人の生活の範囲だけで基準を設定するのではなく、地域の人々の生活あるいは地球規模での視点から、自分の生活の在り方を見極めることが望まれている¹⁰⁾。これらのことから、技術・家庭科において、「身近な環境から地球規模のものまで自己の問題として捉え、意思決定し行動できる市民の育成」を目標とした題材：『様々な視点から環境を考えよう』を提案する。

4.3 学習指導計画の構築

この題材は、中学校技術・家庭科の3年間のまとめとして、第3学年の後半15時間で行うものとする。構築した学習指導計画を表1に示す。また、参考までに構築した学習指導計画での小単元と学習指導要領での各分野の内容と関連を表2に示す。

小単元「環境と家庭生活」(第1時から第3時)では、家庭生活における環境に関わるものについて見直す。具体的には、第1時では環境と生活のかかわりを身近に捉えられるように、家庭ごみや電気、生活排水など家庭や教室における消費段階での環境問題について取り上げる。次時までには個々の家庭において取り組まれている環境に配慮した工夫などを調べさせる。第2時では、個々の家庭での取り組みを発表し合う。他の家庭における環境に配慮した工夫などについても知ることで、今後実践したい取り組みやこれまでに実践していなかったことについて見直し、実際に行動に移す契機とする。なお、生徒の家庭環境は様々なことから、可能な範囲で取り組むように促す。次時までには家庭での使用電力量を調べる活動を行う。このとき、その電力はどのような場面で使用されているかも聞くようにさせる。第3時では、手回し発電機などを用いて発電し、家庭の使用電力量と比較してエネルギーの利用と環境への影響について考えさせる。

小単元「社会における環境」(第4時から第7時)では、社会生活における環境について見直す。生産や

表1 学習指導計画(全15時間)

時間	小単元	学習目標
1時間目	環境と家庭生活	身近な環境について考えよう
2時間目		それぞれの家庭の工夫について知ろう
3時間目		エネルギーの利用について考えよう
4時間目	社会における環境	消費生活の中の環境について考えよう
5時間目		社会での取り組みについて調べよう
6時間目		調べたことを発表しよう
7時間目		四日市公害について知ろう
8時間目	地球の環境	大気の汚れを調査しよう
9時間目		四日市の取り組みについて調べよう
10時間目		四日市公害について確認しよう
11時間目	個々の私生活	自分たちができることを考えよう
12時間目		プロジェクトを始動しよう
13時間目		プロジェクトについて見直そう
14時間目		家庭でのプロジェクトについて見直そう
15時間目		

表2 小単元と各分野の指導項目の関連

小単元	技術分野	家庭分野
環境と家庭生活	B(1)ウ	D C(1),(2)イ
社会における環境	A(1),(2)ア,ウ D(1)エ	D(1),(2) B(3)ウ
地球の環境	内容の取扱い(5)	D(1),(2)
個々の私生活	内容の取扱い(5)	D(2)

流通過程における環境問題について取り上げ、全ての生産・流通活動が環境問題と関連していることを理解させる。生徒の多くは社会生活において消費者として存在する。具体的には、第4時では製品を購入するときにおいても、環境について考えているかどうかについて問い直す。そして、生産や輸送、廃棄といった各過程で使われるエネルギーや環境への取り組みについても考えさせる。この時、LCA(ライフ・サイクル・アセスメント)という考え方を示し、商品やサービスに関わる過程全体で環境について考えていく必要性について理解させる。第5・6時では、社会における取り組みについて調べる活動を行う。例えば、ごみ問題について調べ学習を行う。物の生産・輸送の段階での工夫や廃棄のための工夫、廃棄される際の工夫についてそれぞれ調べ、第7時に発表し全体で共有をする。

小単元「地球の環境」(第8時から第11時)では、地球規模での環境問題について取り上げる。大気汚染や水質汚濁、地球温暖化などを取り上げ、人類の未来について考えさせる。家庭生活や社会生活における環境に対する取り組みについて考える活動を行っても、実践にまでは至らない生徒が多いと思われる。思考を行動に移行させるために、ここではまず身近な家庭生活や社会生活が地球に及ぼす影響について考えさせる。具体的には、私たちの生活に利便性をもたらした科学技術の発達が、環境に大きな影響を与えている現状を

知らせ、その上で身近な地域の環境について調査を行う。最後に、地域の環境に対する取り組みについて調べ、社会全体での取り組みが地球全体に影響を与えていることを理解させる。また、持続可能な社会の構築をキーワードとし、自分だけでなくこれから地球に住む人類（次世代の人類となる子孫）の生活について考えさせることで地球規模の環境についても自己の問題として捉えることができるようにする。例えば、地球規模での問題の1つとして大気汚染について学習する。大気汚染という言葉も聞いても生徒は身近に捉えることができないと考えられることから、過去に我が国において大きな社会問題となった四大公害病を取り上げる。中でも、三重県四日市市で発生した四日市ぜんそくに関わる大気汚染について学習する。具体的には、第8時の学習にはゲストティーチャーを招聘したり、ビデオの上映を行ったりすることで、生徒の意識を高めることができると考える。第9時では、地域の様々な場所での大気の汚れについて調査を行う。第10時では、調査結果を基に、大気の汚れが公害があったころと比べるときれいになっていることを取り上げ、環境保全に関わる四日市市の取り組みについて知らせる。第11時では、身近な地域の中にも地球規模の科学技術の発展に伴う環境問題の発生とその対策があることを捉えさせる。

以上の学習を通して問い直した個々の生活観や環境観をもとに、小単元「個々の生活と環境」（第12時から第15時）では実生活における環境問題への取り組みについて考えさせる。具体的には、第12時ではこれまでの学習を振り返り、環境問題について主体的に捉えさせ、自分たちにできることは何か考え、学級での実践として環境に関する取り組みを立案させる。第13時では、立案した取り組みについて実践する。第14時でその検討を行い、個々の家庭での実践に置き換えて考えさせ、実践を促す。第15時では、家庭での実践を振り返り、新たな課題を見つけることで、取り組みを継続していくように促す。その後、学習発表会などの場において、各自が実践した取り組みをまとめ、発表させることで、生徒相互に成果と今後の課題を共有させ、これからの生活においても環境に配慮して行動できるようにしていく。

5. おわりに

本研究は、中学校技術・家庭科の指導をより効果的に行うことを目的として、まず技術・家庭がどのように捉えられているかについて生徒へのアンケート調査による検討と学習指導要領の検討、既往の研究の検討を基に、技術・家庭科を今後どのように捉えるべきか

について提案した。次に、この捉え方の検討を基に、中学校技術・家庭科のより効果的な教科指導の在り方として、技術分野と家庭分野を1つの教科として捉えた分野《統合》を提示し、【環境】についての題材を提案した。これらの結果をまとめたものを以下に示す。

① アンケート調査による検討

中学生に技術・家庭科についての捉え方をアンケート調査し、その結果を検討した。このことから、教師が技術・家庭科を1つの教科として授業を行うことで、より生徒の意識に即した指導を行うことができることが明らかとなった。

② 学習指導要領の検討

平成20年公示の中学校学習指導要領解説技術・家庭科編を基にした検討から、技術分野と家庭分野の目標が密接に関係していることや、【環境】についての学習をより効果的に行う必要性があることなどが分かった。

③ 既往の研究の検討

中学校技術・家庭科の技術分野と家庭分野を関連して行っている授業についての研究を検討した。調査の結果、教科の目標と内容の協調のレベルにより、以下のように分類できた。

《分離》：それぞれの分野目標と内容に即して行う授業

《連携》：分野目標に即して、それぞれの分野の内容を関連つけて行った授業

《融合》：一部教科目標に即し、一部同じ内容で行った授業

④ 分野《統合》の提案

③の検討結果より、以下のように『統合』を提示した。

《統合》：教科を1つのものとし、教科の目標に即して両分野の視点から内容を捉えて行う授業

⑤ 題材の提案

《統合》の考え方を基に、技術・家庭科において「身近な環境から地球規模のものまで自己の問題として捉え、意思決定し行動できる市民の育成」を目標として、技術分野と家庭分野を統合した学習過程を提案した。

以上の取り組みから、今後の課題として以下のものが示された。

- 技術・家庭科の授業時数や8つの内容との関連を考慮し、より効果的な学習が行えるものへと改善していく。
- 3年間を見通した指導計画を立て、ガイダンス的な内容についての題材も提案する。
- 提案した題材をより良いものにするため、授業を実践し、その有効性を実証的に検討する。

附記

本論文は、佐藤亜由美の作成した論文（2012年度三重大学教育学部卒業論文）を基に、指導教員であった魚住明生がまとめ直したものである。

参考文献・URL

- 1) 国立教育政策研究所：技術科教育のカリキュラムの改善に関する研究 ―歴史的変遷と国際比較―、「教科等の構成と開発に関する調査研究」研究成果報告書（6）（2001）
- 2) 文部科学省：中学校学習指導要領解説 技術・家庭編、教育図書（2008）
- 3) 国立教育政策研究所：特定の課題に関する調査（技術・家庭）（2007）
- 4) 前掲2)
- 5) 早川新二・今尾香代子・西村敬子：技術分野と家庭分野を融合する教材の開発、愛知教育大学教育実践センター紀要、第5号、pp.195-203（2002）
- 6) 今尾香代子・早川新二・粕谷奈歩・西村敬子：技術分野と家庭分野を融合する教材の検討（1）―「おこしもの」作りを通して―、愛知教育大学教育実践センター紀要、第6号、pp.189-196（2003）
- 7) 小山真二：地域に根差したストーリー性のある技術・家庭科の学習パッケージ開発を目指して―全国シェア No.1 マッシュルームの積層栽培に挑戦―、パナソニック教育財団実践報告（2010）
<http://www.pef.or.jp/db/pdf/2010/2010-46.pdf>
(参照 2014-2-4)
- 8) 廣澤秀典：生活の中の課題を題材にした授業―ものをつくる力を導きだす授業づくり―、神奈川県立総合教育センター長期研修員研究報告5、pp.45-48（2007）
- 9) 文部省編：環境教育指導資料―中学校・高等学校編―、大蔵省印刷局（1991）
- 10) 前掲2)

資料1 生徒へのアンケート調査での質問紙

技術・家庭科の学習に関するアンケート

_____年 男・女 名前_____

このアンケートは、技術・家庭科の学習をより良くするためのものです。成績には全く関係ありませんので、自分の思っていることを素直に書いてください。よろしくお願いします。

1. 技術分野と家庭分野が技術・家庭科という1つの教科であることに疑問を持ったり、違和感を抱いたりしたことはありますか。あてはまるものに○印をつけてください。

ある ない

2. <1で【ある】と答えた人に聞きます。>それは、どのような場面ですか。できるだけ具体的に書いて下さい。

.....
.....

3. 技術・家庭科は、技術科（技術分野を学ぶ教科）と家庭科（家庭分野を学ぶ教科）に分けたほうがよいと思いますか、それともこのままのほうがよいと思いますか。あてはまるものに○印をつけてください。また、その理由をわかりやすく書いてください。

分けたほうがよい このままのほうがよい

【理由】

.....
.....
.....

4. 技術分野での学習と家庭分野での学習の違いは何だと思いませんか。また、同じところは何だと思いませんか。できるだけ具体的に書いてください。

【違うところ】

.....
.....

【同じところ】

.....
.....